

産科一次施設における胎児超音波スクリーニング検査の現状；

臨床検査技師の視点から

医療法人エスタブリューシー真田産婦人科麻酔科クリニック

○小田美和 河野順子 久保ちづよ 平川俊夫 平川万紀子

福岡女学院看護大学 福澤雪子

【目的】

当院では、妊娠中の胎児およびその付属物の異常を早期に発見し、妊娠中から出生後早期の医療介入が行えるように、チェックリストを用い専任の検査技師による胎児超音波スクリーニング検査を妊娠 20 週頃と妊娠 30 週頃の 2 回実施している。その現状について述べる。

【対象】

調査期間は 2009 年 4 月から 2013 年 3 月。

外来にて超音波スクリーニング検査を実施した妊婦および当院で出生した児。データは診療録をもとに分析・収集。

【結果】

1. スクリーニング検査で発見された胎児およびその付属物の形態異常：分析対象 3319 例に対し形態異常は 82 例（2%）。この形態異常 82 例のうち、心臓の形態異常は 24 例（29%）であった。心臓の形態異常については、心室中隔欠損（VSD）・血管輪が多く、重複大動脈・完全大血管転位（TGA）・総動脈幹症・両大血管右室起（DORV）・純型肺動脈閉鎖・房室中隔欠損（AVSD）等が見つかった。心臓以外の形態異常は、単一臍帯動脈・水腎症・口唇裂・脳室拡大が多く、先天性嚢胞性腺腫様肺奇形（CCAM）・脈絡叢嚢胞・四肢短縮・内臓逆位・全前脳胞症・小顎症・手指形成不全等が見つかった。

2. 2010 年 7 月から 2011 年 12 月の期間で出生前後に発見された心臓の形態異常の比較：スクリーニング検査で早期の医療介入が必要な心疾患は、出生前に見つけることができ、スクリーニング検査で見つからずに出生後に診断されたのは心室中隔欠損や肺動脈狭窄などで、重症で緊急搬送を要する事例はなかった。

【考察】

胎児超音波スクリーニング検査で、出生後すぐに医療介入が必要な重症疾患児を発見し、高次医療施設へ母体搬送することができた。心臓スクリーニングを含めた胎児超音波スクリーニング検査は、産科一次施設における安全な周産期管理に極めて有用であると考えられる。